浦井先生、諸先生

＞「いかなる場合でも具体性を置き違えざるを得ない」ということ

＞（これは社会科学の出発点として、Weber 的には当然のことであった

＞と思うのですが）を忘れて、「いっそ具体性を置かなければ誤謬に陥ら

＞ない」、と考えるかのごとくに、「具体性を置かないという選択肢」を安易

＞に手にし得ると考える誤謬のように思います。この誤謬の背後には、学者

＞という道徳的責任、ひいては学問という場所の問題があります。

近代化論という枠組みから、ホワイトヘッドとマックス・ウェーバーを比較する

のが可能ではないか？と思い至りました。が、とうてい今ここでやるわけには

参りません。ただ若干のメモのようなものを書き綴りましたので、参考までに

添付ファイルでお送りしようと思います。

＊

「具体性を置き違える誤り」について、浦井先生がМ・ウェーバーの名前を出され、私としては虚を突かれたような感がありました。ひさしぶりにその名を耳にしたような。

思えば、主観と客観とか、具体物と抽象物の「置き違え」について、ウェーバーほど厳格な区別を要求した社会科学者は他にいなかった。にもかかわらず、というか、だからこそ？近年の社会科学においてその名が引証されることが激減しているのではなかろうか。

いつかお話したことがあると思いますが、私の学生時代、東大の社会学といえばウェーバー研究の権化で、まさしく権威主義の頂点として重厚長大なる研究、というか専ら翻訳と註解がひたすら行なわれていた。現代社会と何の関係もない。異様極まりない研究者集団でした。

一方、早稲田の学部の授業では誰も彼もがパーソンズを講じ、ゴルゴダのイエスの磔刑のようなＡＧＩＬ図式が板書され、私どもはひたすらそれをノートしたものです。それに飽き足らぬグループはアルフレッド・シュッツの現象学研究に打ち込み、のみならずシンボリック相互作用やら、エスノメソドロジーやら、舶来の社会理論が百花繚乱のごとく持て囃されていた。これまた日本の現実とは何の関係もない、異様極まりない趣味人の集まりだった。

私としては思想家のジョルジュ・バタイユやロジェ・カイヨワらがフランスの社会学や人類学から多くを学び、独自の思想展開をしているのに惹かれ、仏文の大学院に進みました。フランスではフーコーやブルデューが令名を馳せた時代です。

で、身につかぬフランス語を勉強するのに追われ、理論社会学のことは忘れて行ったのですが、そのうち東大から上野千鶴子や宮台真司が出てきて、なにやら女性のスカートの下を観察するのが社会学だというご時世になってきた。アレ？あのウェーバー研究の牙城としての東大はどうなっちゃったの？

以後、日本の社会学というジャンルはどんどん得体の知れぬ鵺のような存在へ成り果て、いまやマックス・ウェーバーの名を耳にすること自体はなはだ稀になった。なにが起こったのでしょう？

ひとつには社会学というからには日本社会を扱わねばダメだという、前世代への批判と反省があったのだろうと思います。とはいえ、新しい独自の方法論を打ち立てるには至らなかった。学生ウケ、大衆ウケする研究が横行し、出版ジャーナリズムやマスコミと癒合して、愚にもつかぬ書籍が量産されて行った。

もうひとつはもっと広く現代世界の知的状況とかかわる。マックス・ウェーバー的な近代観はもう乗り越えられたと見なされ、今さら改めて論じる必要を感じさせない。

そもそも近年のアジア経済の大発展で、ヨーロッパ世界への関心が相対的に縮小した。「プロテスタンティズムの倫理」？それがどうした？ そんなのユーラシア大陸の片隅の地方の昔話に過ぎないように感じられる。

実際のところ、近代におけるヨーロッパの経済的躍進を「天職」とか「世俗内禁欲」とかいう倫理やモラルに還元するのは大いに疑問です。はたしてそれは資本主義の「精神」の勝利だったのだろうか？

ウェーバーは『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』（岩波文庫）の中で、社会科学をやる者には３つの類型（ないし理念系？）が見られると云う。

１つは「素材探し」で、文書資料や統計や調査報告にばかり携わり、理論的なものへの関心を全く示さない。

２つ目は逆に、新しい思想を漁るグルメ志向で、そもそも事実への関心を失ってしまう。

３つ目は真正な芸術家の気質を備えた者で、既知の事実を既知の観点に関係づけながら、それでいて新しいものを創り出すすべを知っている、これこそ本物の学者だと彼は説く（160頁）。

日本の社会科学者に、この意味での「芸術家」が果たして１人でもいたか？はなはだ怪しい。そこには日本固有の問題もあるでしょうが、より巨視的には現代世界が落ち込んでいる文明の隘路と見なさねばならない。

それは社会から理念が見失われているとか、現代の学者のモラルが劣化している（もちろん、もちろん）という話では必ずしもない。もっと巨大な構造的な問題である。この点を上記ウェーバーの著作を引きつつ、ここで示してみようと思います。とはいえ、その懐柔な行文を正確に辿るのは今は無理です。ごく大雑把な話をします。

周知のようにウェーバーは、現行の政治経済学を鍛え上げ、厳密な学としての社会科学の構築を目ざす。それはいずれ、もっと広範な文化科学に包含されねばならない。その際おのおのの学者が主観的な思いをおらびあげるだけでは意味がない。また客観的と称する資料や文献をむやみに積み上げるだけではどうしようもない。主観は批判され、客観もまた批判されねばならぬ。

たとえば「労働者」とはどんな存在か？

ワタミの社長さんが抱いている「労働者」のイメージは、会社に命を捧げつくす労働奴隷のようなものらしい。これは主観的なものにすぎず、主観的なものを客観的なものだと取り違えている。こういうブラック企業の社長さんは大勢います。

だからと言って、これに抗議する政治家や運動家や学者が持つ労働者のイメージにしても、やはりまた主観的なものにすぎぬ場合が多く、必ずしも客観的とは言えない。たんにヨーロッパの労働者像を理想として日本に紹介するだけだったりする。

さまざまな統計資料を用いるにしても、そこには自ずと予断が入る。社会政策に用いるべき社会科学的概念としての現代の「労働者」のイメージを正確に掴むにはどうすればよいのか。いや、それだけでは済まない。ありうべき未来の労働者の姿を思い描き、これを政策次元で説得的に提起せねばならない。

そこで彼が提起するのが、かの有名な「理念型」というアイデアです。理念型は主観でも客観でもない。現実にはどこにもいない労働者を理念として提起する。それは誤解を恐れず言えば、一種の超越論的な還元を経た超越論的主体です。

以下やや長くなりますが、同著より引用します。マックス・ウェーバーの考えがよく出ている。翻訳が生硬ということもあって、この個所の妙味を以前は読み取れなかった。読みやすくするために改行します。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

実在が何らかの意味で最終的に編入され、総括されるような、ひとつの完結した概念体系を構築して、そのうえで、そこから実在を再び演繹できるようにする、というのが、いかに遠い将来のことであれ、文化科学の目標であるとする考えがあって、これが我々の専門学科に属する歴史家をさえ、いまだに時として捕らえているが、そんな思想には全く意味がない。

計りがたい生起の流れは永遠に限りなく転変を遂げて行く。人間を動かす文化問題はつねに新たに異なった色彩を帯びて構成される。

したがって個性的なもの、つねに変わりなく無限の流れから我々にとって意味と意義を獲得するもの、すなわち「歴史的個体」となるものの範囲は永遠に流動的である。歴史的個体が考察され、科学的に把握される際の思想連関が変化するのである。

したがって人類が、つねに変わることなく汲み尽くし得ない生活について、精神生活のシナ人流の化石化により新しい問題を提起することを止めないかぎりは、文化科学の出発点は果てしない未来にまで転変を遂げて行くのである。

諸文化科学について１つの体系を構想することは、それが取り扱うべき問題と領域を確定的で客観的に妥当する１体系に固定化する、という意味にすぎないとしても、それ自体が無意味な企てであろう。

そんなことを企てても、そこからは常に互いに異質で、１つの体系に統合されようもない数多の特殊な諸観点が次々に取り出されて来るだけだろう。

そんな諸観点の下に実在がそのつど我々にとっての「文化」、すなわちその特性において意義あるものとなったし、また現にそうなっているわけである。（100-101頁）

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

１つの完結した概念体系を構築することが文化科学の目標ではないと、ここでウェーバーは明言する。そんなの無理の皮だと。なぜなら「生起の流れは永遠に限りなく転変を遂げて行く」。そこでは「文化問題はつねに新たに異なった色彩を帯びて構成される」。そんな流動的世界から個性を帯びた「歴史的個体」を切り取ろうとしても、それを取り巻く思想連関がつねに変化するので、その範囲は永遠に不確定なものとしてとどまる。

にもかかわらず文化科学は何らかの体系を構想せざるを得ず、自らが取り扱うべき問題と領域を確定的かつ客観的な１体系に固定化せざるを得ない。そこから互いに異質で、ひとつの体系に統合しようもない諸観点が無数に取り出されて来る。そんな無数の諸観点の下に、そのつど一定の実在が私たちにとって意義ある文化として現出する。人類が生きるのは、そんな意味における文化世界である。これを究明し、かつ創造するのが文化科学の役目である。

永遠に流動する実在の１つの結節点、それが理念型である。それは理念であるかぎりで、現実にたいして超越的だが、実際には現実の流動の中で不断に転変するので、確固不動の原型のようなものとは異なる。理念型は自分自身にたいして、また自分以外の理念型に対して闘いを挑み、己を変化させて生き延び、社会の現実を正確に把握するための尺度たらねばならない。超越論的に還元され、神棚に祀り上げられてしまったら、現実と関わり、現実により検証されるべきモデルとしての意味を失う。

誰もがすぐ気づくように、こうした理念型という概念は同時代のフロイトと共通する部分があります。たとえば「父殺し」という概念は理念型です。

人類史の始まりにおいて実際に父殺しがあったか否かを私は問うているのではないとフロイトは確言する。それは歴史的に検証することが不可能な出来事である。にもかかわらず父殺しという舞台を仮構することで、私たちは原抑圧の何たるかをイメージすることができる。それを思考することが可能になる。「超自我」のような概念にしても同様です。精神分析学の概念はどれも似たような発想からできている。それは臨床における絶えざる検証により把握され、理解を深められ、治療に活用されるべきモデルなのです。

そもそも生活が、ひいては《生》が無限に豊かな諸要素から成り、一定の観点からは汲み尽くし難いことをウェーバーは繰返し強調する。しかもそこからは「１つの体系に統合されようもない数多の特殊な諸観点が次々に取り出されて来る」。

それら諸観点を組織化することで構成される理念型もまた、同じく無限の様相を取りうるでしょう。そのどれが現実とより適合的であるか、より整合的であるかを巡って、理念型どうしの闘争が生じるでしょう。相互に検討し、批判し合う、それこそが学問を進歩させる。社会科学のあるべき姿だ、とウェーバーは考えている。これはマルクス経由の闘争モデルだと見なせます。

しかし理念型どうしの「勝ち負け」で決まるとなると、社会科学の領域に「我こそは第２のマックス・ウェーバーたらん」とする野心的な逸材がやたら出てくるということになりはしないか。切磋琢磨してありうべき理念型の構築に勤しむどころか、お互いに足を引っぱり合い、引きずり降ろそうとする、そんな浅ましい格闘技の世界に学術は成り果ててしまうのではなかろうか。

ホワイトヘッド（ひいてはベルクソン）における「具体性を置き違える偽り」は、原則として科学哲学の領域の話です。マックス・ウェーバーが科学の客観性を擁護せんとするとき、ホワイトヘッドのそれとも重なるような認識論的な倒錯について分析する。

とはいえ後者の関心は社会科学の構築にあり、それはあくまで「歴史的個体」を対象とする。そして歴史は永遠に流動する。ホワイトヘッドの理論は、ウェーバーのような意味での社会や歴史に直結する話ではありません。最後の言葉を美や平和や調和としてしまえば、そこでは階級間の社会的闘争を扱うことができなくなる。

これはホワイトヘッドに限ったことではない。闘争理論と調和理論の間には隔絶がある。昔習った社会学の先生は、開口一番、社会理論には大別して闘争型と調和型があるのだと仰っていました。闘争型もどこかに落とし所として調和を求めざるを得ない。調和型も社会の発展を扱おうとする限りで、どこかに闘争を導入せざるを得ない。その両極の間に無数の理論的な可能性があるわけです。

ちなみにベルクソンの最後の言葉は美ではなく「運動」です。だから同時代の社会運動家、たとえばジョルジュ・ソレルから崇敬され、その『暴力論』で引証されることになった。あるいは２０世紀初頭の未来派やキュビズムの運動描写にベルクソニスムが影響を与えたことはよく知られている。この件にかんしては、いずれまた論じる機会があるでしょう。

話を戻しましょう。

ウェーバーのような古典的な権威が失墜した。これは別の文脈で言えば、「大きな理論の終焉」を意味します。ウェーバーやマルクスを大家として、ほとんど宗教的な開祖のように祀り上げてきた、これまでのヨーロッパの社会科学の枠組みが崩壊した。

以後もドイツ社会学からはルーマンやウルリヒ・ベックなど数々の優れた理論家が出、それぞれに覇を競っていますが、誰もがウェーバー流の「専門化」を受け入れ、一定の枠内で動いている。これは個々の理論家の能力やモラルの問題ではなく、文明全体の趨勢と見ねばならない。いいかえれば各人の善意思や倫理では乗り越えられない。

第二次大戦により１９世紀的なドイツ的学問は終焉し、あるいは頓挫し、ナチスから逃れた学者たちはアメリカの大学に移った。生活のため新しい状況に適応しようとした。偉大な学者の権威を神話的に増幅するヨーロッパ的な文化装置に頼るわけにはもう行かない。シュッツにしても、ハイエクにしても、アドルノにしても、アーレントにしても、筆舌に尽くしがたい労苦を味わう。アメリカの地方大学では、理念型にかんする形而上的な議論などに誰も耳を傾けてくれない（笑）

フォード・システム全盛の消費社会アメリカが必要としたのは統計であり、社会アンケートであり、数理的な経済分析だった。他のどこでもない、まさにアメリカの大学で数理経済学は生まれたのです。ここらの歴史的経緯については恐らく塘先生のご専門でしょう。

ヨーロッパの伝統的な社会科学、その偉大な師をいわば「父殺し」することで戦後経済学および数理経済学は生まれた。そこには原罪の隠蔽と抑圧がある。

浦井先生の仰る、「具体性をわざと置き違えることで自らの発言の道徳的責任を回避しようとする傾向」、別の言い方をすれば「暗黙の価値判断」というものは、なにも最近始まったことではないのではないか。ヨーロッパ的な社会科学が新大陸で生き延びようとしたとき犯さざるを得なかった父殺し、その原罪の抑圧が現代の経済学における暗黙の価値判断を支配している。そんな風に見ることもできはしないでしょうか？

いや私はべつだん数理経済学に恨みなどありません。怨恨も悪意もありません。無知なる門外漢にすぎない。ただ外から歴史的に見たとき、そう考えるのも可能ではないか？間違ってたらご免なさい、という話です。

ちゃらちゃらしたエコノミストの道徳的退廃を浦井先生は非難されます。それはその通りなんでしょうが、実際には個々人のモラルを責めたところで何も問題は解決しないでしょう。経済学そのものが嵌まり込んでいる陥穽から逃れようとして、ちっぽけな自称マックス・ウェーバーたちが蟻地獄の穴から無数に這い出てくる。学としての経済学、ひいては社会科学を正道に戻さぬかぎり、こうした状況は続くでしょう。

大きな理論の消滅が、無数の小さなエコノミストを生んだとすれば、そこには歴史的な必然性がある。むろん大きな理論を復活させれば済む問題ではない。神は確かに死んだ、２度と蘇ることはないのです。

それは社会科学に限ったことではありません。現代のあらゆる学問が似たような状況に陥っていると言えなくもない。そして欧米的学問の輸入にもっぱら終始してきた日本の場合、さらに問題は屈折し、倒錯している。

容易な処方箋など有るとは思えないのですが、自分たちが置かれた状況を正確に見る、ウェーバー的な意味で「客観的」に見る努力が必要なのは言うまでもありません。学者だからそうだと言うのではなく、現代世界で生き延びようとすれば、誰もがそんな努力を必要とされる。そうした難しい状況に私たちが置かれているのは事実のようです。